



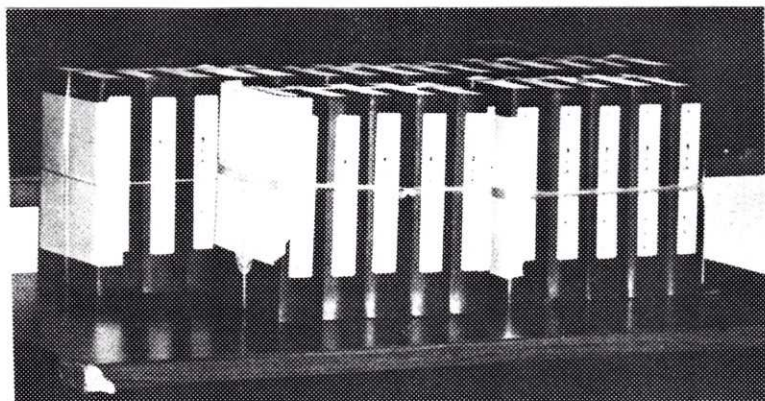
う 羽 化 か

1997年4月
創刊号

横	浜	漢	点	字	羽	化	の	会
〒231	横	浜	市	中	区	山	元	町2-105
発行責任者	代	表						
編集責任者								
						Tel	045-641-1290	
						岡	田	健
						宗	助	悦
								子



漢点字版『漢字源』特集



創刊にあたって

横浜漢点字羽化の会

代表 岡田 健嗣

本会では、機関誌として本誌『うか』を創刊します。本会は、昨年より活動形態を一新し、多くのボランティアの皆さまのご参加を募りました。そして、『漢点字』の資料を製作することを通して、視覚障害者の文字文化の充実を図ることを目的として活動しております。

一年を経て、その活動の方向も定まって参りましたが、それとともに組織としての体を整えなければならなくなりました。本誌は、その一つの方法として提出するものです。

思えば故川上泰一先生がこの『漢点字』を世に問うてから早くも四半世紀が過ぎました。先生は、視覚に障害のある子どもにも学校教育の場で、『漢字』を習得できなければならぬことを説かれ、『漢点字』を考案されました。そして、教育の場で実践して来られました。先生はさらに、『漢点字』は「読む」ものであって、「読む」ことを通して「書く」力を養うべきことを力説なさっておられました。

しかし、公的には、視覚障害者の文字にも『漢字』を取り込んで日本語を表わそうという論議は、未だなされておりません。川上先生の言われたように、「読む」ことを通して表現力を養い、「書く」ことに結び付けようという、あるいは至極当然であるその試みは、未だなされてはおりません。

先生が逝かれてから三年が経とうとしております。先生の蒔かれた『漢点字』の種子が、全国でどのような芽を萌え出させているか、まだ充分明らかではありません。私どももこのような情況下で、できることを、精一杯果たして行きたいと考えております。

創刊号である本誌は、「『漢字源』特集」としました。

昨年三月に、横浜国立大学の村田忠禧先生が、同書の漢点字版を完成されて、同大学に納められたという新聞報道がありました。

従来の仮名の体系的『点字』では、このような『漢和辞典』は求めるべくもないものでした。しかし、この辞典は『漢点字』を「読み・書き」する者にとって必須のものであることは論を待ちません。私は早速先生にお願いして、版權元である株式会社・学習研究社さまのご許可をいただいて、その漢点字版の製作をどのようにしたらよいか、検討を始めました。

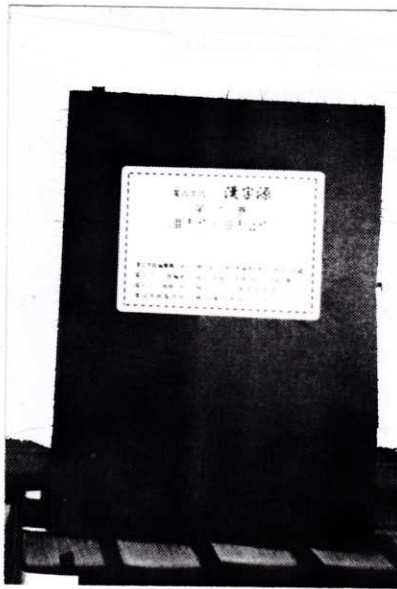
その後の経緯は本文に委ねて、その折りの村田先生のご尽力と、横浜市立中央図書館に蔵書として受け入れていただく際の、市議会議員の大滝正夫先生のご助力に対して、深く御礼申し上げます。

そして、一年をかけて漢点字変換ソフトEIBRKをご開発下さいました木下和久さまを中心に、約半年をかけて、全九〇巻の完成を見ることができました。木下さまをはじめ、会員ボランティアの皆さま、本当にありがとうございました。

漢点字版『漢字源』の完成と、中央図書館への納入を終えて、ボランティアの皆さまは、次の目標に向けて頑張つて下さつておられます。『漢点字』の普及には、社会から視覚障害者に向けて、文字・文章を読みこなす力が求められ、視覚障害者は、それに応える努力を惜しまないという、両方向の意識の改革が必要と思われれます。その一步として、従来の仮名の点字を読んだり、テープに録音されたものを聞くことだけでは充分な『読書』とは言えないということを、視覚障害者のみならず、一般社会の皆さまにもご確認いただきたくお願い申し上げます。そのことが本来の意味で、視覚障害者にとっての「バリアフリー」の一つの実現になるのではないのでしょうか。

中央図書館の皆さまには、この間たいへんお世話になりました。今後も視覚障害者の文字に『漢字』の無い現状を見据えて、積極的な読書環境の改善をお祈り下さいますようお願い申し上げます。同様に、学校や福祉に携わっておられます皆さまにも、視覚障害者の資質の向上に、『文字』の分野からのアプローチを積極的に試みていただきたくお願い申し上げます。

一九九七年四月十五日



完成した 漢点字版『漢字源』

『漢字源』の漢点字訳化のいきさつ

横浜国立大学教育学部 村田忠禧

私が漢点字の存在を知ったのは横浜国立大学教育学部に全盲の学生が入学することになったからである。事前にパソコン通信などを通じて、点訳ソフトや音声合成装置の存在を知っていたので、それらを使えば問題は解決するだろうと思っていたのだが、どうも仮名や音声の世界だけでは不十分だとのこと。入学した学生（是沢富夫さん）からいろいろ話を聞いていくうちに、漢字を表現できる点字があり、しかもそのための点字ワープロもあることが判った。

彼の大学での勉学を支えるために、パソコンや点字プリンタなど必要と思われる機器を購入してもらおうとともに、それを活用しての教材作りをも始めることになった。漢点字の発明者である日本漢点字協会の川上泰一先生や漢点字ワープロを開発された鳴門教育大学の末田統先生を訪れ、ご教示とご支援を請うとともに、県立平塚盲学校の船越先生や墨田区の斉藤寿美子さん

を中心とする点訳ボランティアグループの方々から具体的な操作を教わった。斉藤さんたちはさまざま教材作りを実際に行い、是沢さんの大学での勉学を実に熱心に支えてくださった。大学側で主として行ったのはこれから述べる『漢字源』の漢点字訳の作業であった。

是沢さんは第二外国語に中国語を選択し、漢字文化にとりわけ興味を示していた。そこで私は中国における点字がどういうものかを知るために、自分の研究目的で中国を訪れた際に北京の盲学校をも訪問した。そこで判ったことは中国の点字は日本の仮名点字と基本的に同じで、発音を表記するものであり漢字を表現するものではない、ということだった。漢字を表現できる点字は実は日本にしかない。漢字を抜きにして日本や中国の文化を研究することは難しいので、ここは漢点字を積極的に活用するしかない、と腹をくくることにした。

その際どうしても必要になるのは辞書である。個々の漢字の音訓を示した漢点字辞書はあったが、具体的な用例を示した辞書はまだなかった。ちょうどその頃、電子ブック版『漢字源』が学研から発売された。そこで学研から横浜国立大学教育学部の視覚障害者の学習用に、という条件のもとで漢字源のソースデータを提

供していただくことができないものかと考え、この虫のいいお願いを学研に提出してみた。ありがたいことに学研はそのような目的ならば、ということでも快諾してくださり、われわれは膨大なデータの入力作業からは解放され、仕事は漢点字化するための加工と点字出力に限定されることになった。もし入力作業までわれわれが行うのであったなら、実際にはこの計画は実現できなかったであろうし、そもそも辞書作りを計画することすら思いつかなかったであろう。辞書の電子化、CD-ROM化は点字の世界にも革命を起こしているのである。

しかしわれわれが入手したソースデータはあくまでも電子ブックのためのデータであって、いろいろな加工作业が必要であった。不要なデータを削除すること（これは結構面倒な作業であった）、特殊な記号を漢点字用に置き換えること、そして一番苦労したのは漢点字の配列順に辞書の中身を組み替えることであった。漢和辞典は部首、筆画の順に並んでいるが、漢点字の配列はそれとはまったく異なる。漢点字の配列表にもとづいて大量のデータから目的の親字を検索し、その部分の記述をすべて新しく移し変えてゆくのはかなり根気のいる作業である。しかも漢点字の配列順そのものに問題があった。実は点字ワープロが動くパソコン

はNEC製でこちらの漢字コードは七八年に制定されたいわゆる旧JISといわれるもので、それにたいして編集作業に使っていたパソコンは私が親指ソフトキーボードのユーザーであることもあって富士通製で、こちらは八三年に改定された新JISコードであり、両者では一部の異体字関係にある文字の入れ替えがなされていた。漢点字も異体字に別のコードをふりあてていたので、エディタで編集した内容と点字化されたものとは結果が一致しない場合があった。漢点字順の正しい配列に並べ替えることができたのは是沢さんが一つ一つ指で確認してくれたお蔭である。正に暗中模索の作業であった。この他にも編集途中でハードディスクを誤って初期化してしまい、せつかく苦労して作り上げてきたデータを一瞬にして失ってしまう、という今だから笑い話にすることができ、当時は自分の軽率ぶりにただ呆然とするのみ、といったこともあった。

編集作業でのもう一つの苦労はファイルをどの程度の大きさで分割すればよいか、ということであった。当時の点字ワープロでは一文書として処理できるファイルの大きさにかなり制限があった。順調に印字されているので喜んでいたら、急に文字化けが生じてしまい、やり直しというようなことがよく発生した。何度

も失敗を重ね、ほぼこの程度までなら大丈夫、という目処が立ち、点字出力用のファイルを作成した。当初は三二六ファイルにもなったが、再度整理して二〇六ファイルとした。一ファイルを出力するのにおよそ一時間かかり、授業の合間にみんなで手分けして出力したもののなので、印刷だけでも大変時間がかかった。しかも印刷途中での紙詰まりといったトラブルや、せっかく印刷してもファイル名の印字を忘れたためもう一度刷りなおし、というような事例も結構あり、予想以上に時間がかかった。あれやこれやのトラブル続きの難産ともいえるべき漢字源版『漢点字』が誕生したのは是沢さんの卒業を間近に控えた一九九五年十二月のことであった。

漢点字版『漢字源』は書籍としての『漢字源』とは同じではなく、JIS外漢字は収められていない。しかし日常的に用いられる漢字はほぼカバーしているのでも、ともかく基本的な漢和辞典として漢点字使用者にとつては非常に役立つものであろう。この計画を思い立った時から、この仕事は決して一人の学生のためのものというだけでなく、同じような境遇にある人々にも役立つはず、という気持ちがあった。せっかく出来上がった漢点字版『漢字源』を大学内だけで眠らせておくことはもったいない、という気持ちが心の奥底に

あった。幸いなことに『毎日新聞』が漢点字版『漢字源』の完成を報道してくれ、横浜漢点字羽化の会の吉田さん、そしてその主宰者である岡田健嗣さんが注目してくださり、横浜市中央図書館の蔵書にするという計画を出してくださった。学研もそれに快く承諾してくださり、横浜市中央図書館側でも積極的に対応してくださり、木下和久さんを中心とする横浜漢点字羽化の会のみなさんのパワーが全開し、わたしの目からみると「アツ」という間に素晴らしい漢点字本が出来上がった。われわれが作ったのはバインダーに綴じたファイルに過ぎなかったが、今回出来上がったのは実際に立派に製本された書籍そのものであり、ただただ感嘆するのみ。難産の子が立派に成人して美しい晴着を着て見せてくれたような思いがする。

漢点字の原理は知ればなるほどと納得できるものがあり、正に「コロンブスの卵」である。しかしそれを実際に作成した川上先生のご苦労は大変なものであったと思う。残念なことに漢点字版『漢字源』の完成を見ることなく、川上先生は他界されてしまった。中国の諺に「吃水不忘開井人」（水を飲む時には井戸を掘った人を忘れない）というのがある。これは周恩来総理が日中国交回復の際に、両国の先人たちの苦勞を指して述べたものであるが、井戸も放置しておけば水は

枯れてしまう。日中友好の事業もそうであるし、漢点字の普及の事業も同じことで、水源を絶やさないよう地道な努力を続ける必要がある。われわれも漢点字を發明した川上泰一先生やその遺志を引き継いでいる人々が全国にいることを忘れずに、漢点字という知恵の泉を大切に守り、発展させる必要があるだろう。

最後に、横浜漢点字羽化の会のみなさん、本当にご苦労さまでした。みなさんの活動にかえって私のほうが励まされました。今回のことが会の新しい門出になることを期待しております。

一九九七年四月七日



横浜国立大学 村田忠禧教授

'97. 3. 15 『漢字源』譲渡式にて

漢点字版「漢字源」を完成させて

会員 木下 和久

漢点字版の「漢字源」を作って、横浜中央図書館に納めたいという計画が岡田さんからもち込まれたのは、去年の夏ごろのことだったと思います。横浜国大の村田先生が、苦心の末完成された学習研究社の漢点字版「漢字源」を、この羽化の会で、一セット作り、それを横浜中央図書館に納めたいというものです。

中央図書館にこれを受け入れていただくためには、前例がないことで、並々ならぬ苦労が必要だったようです。これらの交渉ごとは、すべて岡田さんがされて、何とか受け入れ態勢が決まりました。そうなると、具体的にどのような「漢字源」を作るかが問題となります。最初の計画では、点字印刷されたものをファイル綴じにしようというものでしたが、せつかく大部の点字辞典を図書館に置くのに、ファイル綴じでは、あまり様にならないので、本格的な製本をしたらと、提案しました。

そんな提案をしながらも、本格的な製本の技術については、全く未知の状態でした。ただ聞いてみると、ライトセンターなどでは、ボランティアグループが日

常に製本作業をやっているということなので、それを見せただければ何とかなるという見通しで、この計画を進めることにしました。

さて、村田先生からテキストデータのフロップピーが届いたのを見ると、さすがに一〇三巻になったという二〇六個のファイルは膨大なもので、これを全部点字印刷して、さらに製本するというのは大変なことだと、あらためて感じました。そして、その内容について岡田さんといろいろ意見を交換しているうちに、各種の記号類の扱いを少しずつ変更したほうがよいのではないかということ、それを実行することになりました。たとえば、読み仮名は、≦と≧で囲まれていたのを、羽化の会で使用しているルビ符（ゝ）に変えたり、見出しや熟語の文字を【】の括弧で囲んでいたのを、普通のかぎ括弧（「」）にしたりしました。これは、漢点字に変換したとき、よりコンパクトになって、読みやすいと考えたからです。また村田先生の場合は、一ページ二十一行の片面印刷でしたが、今回の場合は、両面印刷の点字プリンタを使うので、一枚の両面で本文二十八行印刷することにしました。そのため、一冊に収容できる分量が増えるということで、全体の分冊数を変更して、九十冊にすることにしました。これらのことを実現するには、膨大な量のファイル

の変更をいちいち手でやっていたのでは能率も悪いし、間違いも起こりやすいということで、すべてそれぞれに対応するプログラムを新たに作り、作業そのものは自動的にできるようにしました。このような作業は、試行錯誤的なものですから、作ったプログラムの本数は、延べ二十本ぐらいいりました。さらに、やっているうちに異体字・旧字についての索引がほしいという要望が出され、これもプログラムを作って対応しました。

製本に関しては、ライトセンターの製本グループの作業を見学させていただき、製本材料の業者さんからいただいた資料なども参考にして、最終的に糊付け製本とすることにしました。これは、最初のうち糸綴じ製本とする予定でしたが、作業の容易さと、出来上りのよさを勘案して、このように決めたものです。特に糊付けの方法については、独自の工夫を凝らして、使いやすく丈夫なものができたと思っています。実際の作業には、作業がやりやすく、出来上がりが均一に行くようにと、様々な補助具を作りました。これらの道具と、つちかった製本技術は、これからの羽化の会の活動に、大いに役立つて行くことでしょう。

製本作業は、なんといっても手間のかかるもので、羽化の会の多数の方の共同作業によって進められまし

た。それでも、これは微妙な熟練を要する作業ですから、なれないうちは失敗作も作ってしまいます。このような難関を乗り越えて、全九十冊の「漢字源」が完成したというのは、感慨ひとしおのものがあります。

この漢点字版「漢字源」は、一部の前書きを除いて、すべて漢点字で書かれています。ということは、ある程度漢点字が読めないと、本文を読むことができません。従って、これはある程度漢点字をマスターされた視覚障害者が、さらに高度な漢字の世界を探索するための辞典ということができます。一人でも多くの視覚障害者が、この「漢字源」を利用して、漢字の奥深さを味わっていただけることを切に願うものです。

製本失敗の弁とEメール

会員 西 淳策

いきなり糊付け作業に挑戦して、家へ帰ってからも出来ばえに自信がなく、押圧乾燥後にどうなったか翌日、木下さんに電話でお聞きしたところ、お言葉は遠慮がちなが心配したとおりのご返事がかえってきました。お宅での今回の作業日、早速この目で確かめた

ところ、どうひいき目にみても失敗作でした。

もともと不器用を自認する私ゆえ、人集めを引き受け、いわば「手配師」の立場にありながら、つい、しかも肝心の作業の部分に手を出してしまったのが、あみステイクでした。実はラポールネットを通じての、参加者募集の中でも「告白」申し上げたのですが、つまり、この世の中にはどうやら「器用な人」、「普通の人」、「不器用な人」と三つの人種がいると思うのです。真ん中の人以外は少数派に属し、第1番目に「超」がつくのは木下さんとすれば、三番目の代表は私であり、お役に立つどころか、お厄に立ってしまったのです。

今回は結構多数の方が協力されたのですが、実際は木下さんが殆どやられたといつてよく、下準備に協力された宗助さんを含めた二、三人を除いては糊付けを多少やった程度の人や、更には糊付けの折り目を付けただけの人もかなりいて、まあ次に向けての足がかりにはなったと言うのが本当のところでしょうか。ところが私の場合は情けないことに、あとから手間も余計にかかったり、材料の無駄ともなつて、足を引く張る結果となつてしまいました。やらないほうがマシだったことになりました。ご苦勞をされた木下さんには、たいへんご迷惑をお掛けしてしまい、申し訳なく思つて

おります。

誤解のないよう一言そえたいのですが、何しろ時間に追われての事情もあったので問題でしたが、慣れれば誰でも出来るようになるとは思いますが。それに木下さんも仰るように製本の仕方もよりやりやすく改善されることでしょうし、自信のない方も是非チャレンジされるよう期待します。

ということ、原稿を寄せるよういわれて創刊の今回、「漢字源点訳完成特集」という主旨からすれば、私も全く関与ゼロでない（マイナスに）ところから、気が重かったのです。が、例会でつい宗助さんと目があってしまった、念をおされて結局恥をカクはめになっ
てしまいました。

さて反省はこの位にしてこの機会に先ほどの電子（E）メールについてふれてみたいと思います。ラボールネットの「羽化の会」の電子会議室の議長に私になつていて、不十分なりともパソコン通信利用の推進役をしているのですが、まだ加入者は二十名程度であり、全体に広めて本格的に活用出来るようにしたいのが目標です。

そこで特に未加入の方々に向けてですが、ご認識を新たにして頂こうとその有用性を訴えたいと思うのです。最近のご承知のように一般家庭にも情報化の波が

押し寄せつつあり、インターネットという語句が巷に氾濫しています。パソコン通信もかなり浸透、普及に拍車がかかっているようですが、どちらかといえば、趣味的あるいは流行的な感じがしないでもありません。果たしてどこまで必要性があるのだろうかとの素朴な疑問も否定できません。一方この我々の活動に照らしてみると、それこそまちがいになく実用的で、最適な道具であることに気がつかれるものと思います。こんなにぴったりにしたパソコン通信の利便性を他のボランティア活動などで見つけるのは難しいのではないのでしょうか。

ではその理由となるポイントをまとめてみましょう。

①この活動はパソコンの利用が前提なので、会員全て設備的には既に用意されていることになりました。いちばんの問題の条件が予め概ね整っているということ、これは大変なことですよ。他の活動では考えられないでしょう。

②文字の入力が主な仕事ゆえ、利用するのはあらためて特別なことでなく、会員誰もがとつきやすい。

③文章をテキストファイルにして、会員間で校正のやりとりや、引き渡しを行っているわけですから、もうこれはまさにEメールのお得意の分野です。漢点字

変換文書の転送も当然可能です。

④費用を最小限に抑える、これがボランティア活動の宿命ですが、ラポールネットという無料のネットが使えらるという願ってもない条件にあること、電話代だけは必要ですが一〇〇〜二〇〇円ですみます。郵便代も馬鹿になりませんからね。

⑤しかも即時性があり伝達の敏速な対応ができます。その点はFAXも同様に思えるかも知れませんが、用紙への印刷が必要なのと、利用可能なファイルを生のまま送れないということでは決定的な差があります。つまりオンライン性の面で、FAXの限界は明かです。

⑥活動における会員どうしの情報連絡やコミュニケーションへの活用については言うまでもありません。

⑦最後になってしまいました。最も大事なことも知れませんが、岡田さんとの間でやっているように、目の不自由な方とも殆ど問題なくやりとりができるということです。

以上ご覧になればこれを使わない手はないと、合点！//していただけることでしょう。

実際に私の場合を言えば、「朝日歌壇俳壇」を担当している関係上、岡田さんと毎週、入力ファイルのやりとり、月刊での最終レイアウトなどEメールを日常

的に利用しております。そのほか毎月の会報を同報ファイルでID全員に流したり、各種連絡などに用いたりしてその利便さを強く感じております。

この原稿もEBRK付属のエディター(JX)を使って入力し、メールで宗助さん宛送ったものです。

ついでながら、話が横に跳びますが、漢字に外字、この場合漢点字を含めない限り、通常の漢点字用入力にもテキストファイルである以上、「一太郎」である必要はなく（これは漢点字変換用入力でも同じです）、エディターの方が速く快適です。勿論漢点字にしてもテキストとして外字はソフトJIS（パソコン通信は普通このタイプ）なので、白いだけの抜け字（■で印刷では黒字？）になります。そのまま送れます。ただし送受信とも画面にその字を出して見たり、プリントしたりするには、会発足以来のリーダーである吉田信子さんに提供していただいている外字ファイルを利用することになるので、そのときには「一太郎」が必要になります。念の為。

視覚障害者と漢点字

栃木県立盲学校 理療科教諭 小池上 惇

わが国の文化は漢字文化といわれている。即ち、一般の文章は漢字仮名交じり文で書かれ、漢字なくしてはわが国の文化は成り立たないのが現状である。そんな中で、私達視覚障害者は音標文字である点字を使用し、学習や手紙のやりとり、執筆など全ての文字処理を行ってきた。

私自身も以前はこのような状況にさして疑問も持たず、情報量の少ないことを除いてはさほど不自由も感じてはいなかった。ただ、以前から普通文字を書きたいという欲求は強く、高校生の頃から何度となくアプローチしてきた。

最初に取り組んだのは仮名タイプであったが、仮名文字だけの文章は晴眼者には読みにくいものだとみえて、教育実習の指導案を仮名タイプで書いたところ、指導教員から「次回からは点字で提出するように」といわれてしまった。

次に挑戦したのは六点漢字である。昭和五四年頃だったと思うが、ある雑誌に六点漢字と漢点字の紹介記事が載っていた。その時の印象では、漢点字は漢字の

形を知らない私にとつてはまったく理解できないものであった。そこで先ず取っつきやすかった六点漢字を勉強することにした。六点漢字は筑波大学付属盲学校の長谷川貞夫先生によつて考案されたものである。基本的には音と訓または部首との組み合わせで漢字を表現しようとしたもので、先天盲の私にとつては非常に分かりやすいものであった。先ず、漢字を点字で表せることに感銘を受けた。音楽と数学のガク、地獄と天国のゴクの違いや、省エネのシヨウは小さいのシヨウでないことなど、以前は何気なく使っていた言葉でも、漢字で表現するとなると大変難しいことが分かった。六点漢字を使用したKBPというワープロソフトが手に入り、それを使つてテスト問題を作つた。初めて自分で書いた普通文字を晴眼者に読んでもらつた時の感激は今でも忘れることができない。その後、漢字の使い方を覚えるために六点漢字で書かれた文章をいくつか読み、六点漢字そのものはいぶ覚えだが、点字と普通文字のレイアウトの違いや漢字の使い方が分からなかつたため、漢字仮名交じり文を正しく書くことはなかなか難しかった。

当時、コンピュータは非常に高価なものではあつたが、そのころ「点字毎日」で「チノワード」という漢点字を使用したワープロソフトがあることを知り、そ

のソフトを使って普通文字の教材や原稿を書きたいという思いが大きく膨らみ、昭和六十一年九月から漢点字の勉強を始めた。漢点字は漢字の構成を重視し、読みにも配慮して作られているため、最初に漢点字に接した時とは異なり自分が考えていたより短期間で習得することができた。約一年で八十五回の書取問題を終わり、漢点字訳された小説などを何冊か読んでいううちに、いくつか分からない文字があっても何とか内容だけは読み取れるようになってきた。昭和六十二年にチノワードが使えるコンピュータを購入し、自分で文章を作ってみた。読んでいる時は何となく分かっているつもりだった漢字も、いざ書いてみるととても難しく、「漢字は読めても書けない」という言葉が実感された。

漢点字は、六点漢字に比べ読みやすいが、書くとなると普通の点字板では書けないので何となく億劫になつてしまふ。

晴眼者が日常生活の中で常に漢字と接している状況と異なり、私達視覚障害者はかなり努力しないかぎり漢字と接することはできない。漢点字協会からも漢点字の読み物は出版されているが内容に偏りがあり、私達のニーズに応えたものとは言えなかった。そんな中で、岡田さんを中心に進められている「横浜漢点字

羽化の会」の活動は私達漢点字のユーザーにとつては貴重な情報源となつている。ソフトの開発、漢点訳書の出版など今後の発展を祈念すると共に、私もできるだけお手伝いさせていたがたいと思つている。

盲学校では最近生徒の重度重複化が進み、普通文字も点字も使用できないような生徒が増加しつつあり、また、中途失明者の増加により点字指導も困難になりつつある。全ての生徒に漢点字を教えることは無理としても、大学へ進学し一般就職を目指す生徒に対しては早期から漢点字指導ができるような体制は作りたいと思つている。それが今後の漢点字の発展のためにも是非必要なことだと思ふ。



例会風景

機関誌「うか」創刊に寄せて

会員 小倉通男

この度「羽化の会」の機関誌が発行されると言う。

この様な企画が実現の運びとなつたことは本当に素晴らしいの一語に尽きる。担当の方のご苦勞は大変だと思ひますが何とか成功させて、これを機に會員相互の親睦が深まり、更に会の活動の原動力となることを心から切望してやみません。

今回の「うか」発行に当たつて思ひを新たにす俳句があります。

それは劇作家であり俳人でもあつた久保田万太郎の有名な句に

「湯豆腐やいのちのはてのうすあかり」

というのがあります。

俳句というのは読者それぞれが自由に解釈すればよいので、こうでなければならぬと言う解釈がある訳ではないが、ここで敢えて私なりの鑑賞を述べて見ましよう。

この句を読んでまず目ぶたに浮かぶ光景、それは冬の寒い夜。外では冷たい木枯しが吹き、雨戸をカタカタ言わせています。吹雪が舞つて戸の隙間から粉雪が吹き込んでいるかも知れない。しかし部屋の中では燃え盛る火に掛けられた鍋にぐらぐらたぎつたお湯の中で湯豆腐が浮きつ沈みつしている。

もうもうと立ち上がる湯気。その湯気を囲んで向かい合った二人。友人が久しぶりにやつて来て昔話に花を咲かせているのでしょうか。それともこれからのお互いの行く末についての思い、不安などを語り合っているのかも知れません。無論彼が提げてきたお酒も程良くお爛がついて、差しつ差されつて……。

二人はお互いに相手の幸せ、喜びがそのまま自分の幸せ、喜びとなり、そしてまた相手の悲しみ、苦しみが即、わが身の悲しみ、苦しみとして理解し合える間柄、そしてお互いのいのちをいとおしみ、思いのたけを話し合える二人なのです。生きていればこそこうして湯豆腐をつつき酒を酌み交わして、夜の更けるのも忘れて話して夢中になれるのです。

「湯豆腐やいのちのはてのうすあかり」 万太郎

この句を口ずさんでいるとそんな人間模様がじわじわと見えて来るではありませんか。

私は機関誌「うか」が万太郎が詠っている「いのちのはてのうすあかり」として私たち「羽化の会」の連帯意識を深め、そして更に将来は、私たちと視覚障害者の人達との結びつきをはかる架け橋となつて明るく灯つてほしいと思うのです。

最後に「うか」の編集を担当される宗助さん、本当にご苦勞様です。心からご健闘を祈ります。

おぼろ夜や アイメート行く 石だたみ 朔太
註、アイメートとは「盲導犬」のこと

「羽化の会」の会誌 人の会誌

会員 船田 和子

昨年三月のある朝、いつものように読売新聞を広げ、ページを繰っていくうち「漢点字普及にぜひ協力を」という題字が目飛び込んできました。これが、私と

会との出会いでした。

実は私は十五年前に、点字の勉強を始めていたのですが、主人の転勤で各地を回っているうちにそのままになり、それを生かせないでいました。この記事で初めて目にした「漢点字」という言葉に心が動かされたのも、こういう下地があつたからでしょう。

岡田さんは記事の中で、漢点字の長所を次のよう明していました。「例えば、『慕情』。以前の私なら、『ボジョウ』という音を覚え、その意味をばく然と捕らえていたのが、漢字が分かると、『慕う』と『情』でできているのが読み取れるし、意味もすんなり分かる」。これを読んで、ふだん何気なく使っている漢字の意味深いこと、日本語のすばらしいことを再確認しました。そして、以前私が習った点字は、仮名だけの点字だったことを思い出したのでした。

折しも、そろそろ末の子が親の手を離れる頃で、自分自身のこれからを考え模索する数年を過ごしていました。そして、ボランティアとして社会とのつながりを持ちたいという思いが強くなっていた時に出会った記事でしたので、すぐに岡田さんに電話をし、会に加えていただきました。以来、新しい作品をどの方々に担当していただくか、会員相互の連絡：など、コーディネートとしてお世話をさせていただいております。

会員の方々は立場も年齢もさまざまです。中でも体が不自由にもかかわらず、或いは私よりお年が上の方々が、「今、元気なうちにいろんな事を吸収し、やがて外に出にくくなっても社会のお役に立ちたい」と、意欲的に会の活動に取り組んでおられる姿勢には佩服いたします。はたして十年、二十年後の私はこういう姿勢で活動しているでしょうか。自信はありませんが、大いに刺激を受けて、諸先輩方の後に続けたいと願っております。活動を通じて知り合った、本当に素晴らしい方々との触れ合いは、私の楽しみのひとつになりました。原稿のやりとりの際、一言付けてくださったメモはとてうれしく読ませていただいております。今では箱一杯になったこれらの手紙は、私のエネルギー源となっています。

会では、一冊でも多くの本を点字にし、漢点字を読む人が増えることを目標にしています。さらに、これから字を覚えようとする視覚障害者の子どもたちのためにも力になりたいと考えています。一人では何もできませんが、多くのボランティアの人々の力があります。その力が結集されるよう頑張っていきたいと考えていますので、今後ともよろしくお願いいたします。



← 大滝 正雄 市議

↓ TVK取材風景



'97.3.15 『漢字源』譲渡式にて

【テレビ放映】

'97.3.19 11:30~45

TVK「日本大通り情報

—ともしびレポート—

'97.4.10 18:42~44

NHK「各地のニュース」より

プロフィール：山形県山形市生まれ。小学校から大
学まで山形で学び、卒業後も山形に就職するが、突然
トラバークして神奈川県に住み着く。トラバーク先の
コンピュータソフト会社に十年以上勤務するが、リ
ストラにより退職。現在は無職。趣味は手芸、映画鑑賞
Jリーグのテレビ観戦（横浜市民なのに鹿島アントラ
ーズファン）。夫と七歳の娘の三人暮らし。

二十代の私は、福祉とかボランティアといったもの
にはまったく無関心でした。自分の人生は自分の力で
切り開いていくもので、他人の助けはいらなれないと思っ
ていましたし、自分も他人を助けて生きていく事など
考えたこともなかった気がします。

ところが、三十代になって子供を産んでから考えが一
変しました。出産後も仕事を続けるために、八ヶ月
の子どもを保育園に預けました。保育園とはもちろん
お金を払って子どもを預ける場所ですが、職員の方々
には言葉では言い表せないほどの助けと愛情をもらい
ました。この時やつと私は、「人間は他人の助けなし
に生きていくことはできない」ことに気づきました。
そうこうしているうちにバブルがはじけ、世は不景
気に：勤めていたソフト会社は工場相手のプロコン主
体だった為影響が大きく、出張・転勤のできない既婚

女性はリストラ対象となりました。バブルの頃はさん
ざんこき使っておきながら、景気が悪くなればпой！
すつかり儲け至上主義に嫌気がさして、「これからは
自分が今まで他人にお世話になった分をお返しするの
だ！」と思ったのがボランティアに目覚めたきっかけ
です。

ところがボランティアも気持ちだけではだめよう
です。各種ボランティアの講習会はほとんどが夜。数
少ない昼間の講習もいつも抽選ではずれ。やつと見
つけたボランティアの点字通信教育も、やはり勤め人相
手に通うしかなないとわれ挫折しました。“結局世の
中子持ちの主婦なんて必要とされていないんだ”とか
なりなげやり状態でした。

そんな時、この会の講習会を市報で見つけ、その前
年に購入したパソコンのおかげで拾っていただき、今
に至っています。

最初の頃はまとまりもなく、一体この後どうなっ
ていくのやらと不安でしたが、最近はずいぶん軌道に乗
りほつとしています。

ボランティアには厳しいノルマも期限もなく、収入
を得る仕事に比べると天国のようです。ただ、そう
なると、責任感がどうしても希薄になりがち。ついだ
らける自分を「こんな事ではいけない」と、時々叱咤し
ています。

今回から、本会の代表である岡田健嗣に、その活動や展望についてインタビューしたいと思います。インタビューアーは編集部です。

編集部 今回このような機関誌『羽化』を創刊することになりましたが、その創刊の辞に当たってお話からお聞かせ下さい。

岡田 横浜漢字羽化の会として活動を始めてからもう五年になるのですが、現在のような規模になつてからは、まだ一年にしかありません。そこで、会員各位のコミュニケーションの場が必要になつて来たことと、会の社会的なステータスの確認の場としても、会の機関誌に寄せる期待が高まって来たのを感じていました。そしてこの度、漢点字版の『漢字源』が完成したのを機に、発行することにしたのです。

岡 編 『漢字源』について、お話し下さい。
 岡 本号は「『漢字源』特集」ですので、詳細はそちらに譲るとして、ここで申し上げたいのは、電子ブック版との対比です。

編 今回のデータは、その電子ブック版のものをご提供いただいたものがついておりますが、

岡 そのとおりです。横浜国立大学の村田忠禧先生のご尽力で、そのデータを出版元である学習研究社さまからいただいたものを使わせていただきました。さてその電子ブックについてですが、私ども視覚障害者がそれを読もうとしますと、二つの方法が考えられます。一つは、音声ソフトを使って検索ソフトから出てきた情報を音声データに変換して、音声装置に送って、耳で「読む（聞く）」方法です。もう一つは、ピンディスプレイという装置を使う方法です。これは、点字のパターンをピンで表示して触読するものです。この装置では、一般的には電子ブックから直接『漢点字』が読めるものではなく、一度テキストデータに落として、それをピンディスプレイで表示されるような形のデータに変換して表示させるのです。このような装置は、『漢点字』に対応するものを、本会の木下さまが、EIBRKのシリーズとして、EIBRKBというソフトを作っていました。しかし、『漢字源』の電子ブックにはプロテクトがかかっておりまして、そのままではテキストファイルに落とすことができません。したがって、視覚障

害者が電子ブック版の『漢字源』を利用しますには、音声を頼りに使わなければなりません。

その電子ブックがピンディスプレイに対応していると仮定した時、それでも全九〇巻の漢点字書としてご製作なさいましたか？

岡 私の考え方ですが、しかも古い考えかもしれませんが、本は、やはり「紙」でなければなりません。ピンディスプレイというのは、一行しか表示されません。本というのは、ある広がりと厚みを持っております。触読であつても、その幅と深みを感じ得するには、その広がりを感じできなければなりません。紙で織られた本に匹敵するものは、一般の書物にもまだ出現していないのではないのでしょうか。

編 では、ピンディスプレイはお使いになりませんか？

岡 いいえ、恐らく日本一多くの時間ピンディスプレイに向かっているのではないのでしょうか。

編 どのようにピンディスプレイをお使いですか？

岡 専ら、書いたものの推敲です。現在使っておりますソフト EBRK は、ピンディスプレイで表示しながら、文字の入れ替えをしたり、レイアウトの調整をしたりできるのです。そのような機能を駆使して、文章の構成や、校正に使用しております。

その限りでは、私にとってこのピンディスプレイに代わるものはございません。文章を「書く」ということは、「読みながら」行うことだということとが、この装置を使って初めて分かりました。

編 そうしますと『書物』としては、従来の形態の点字書がやはり最もよいものとお考えですか？

岡 現在では、まだそう言わないわけには参りませんが、将来的にはペーパーレスもありうると思いが、**「読む」**のためには、従来の形が最も手に馴染んでいるものですから、本は、紙であつて欲しいのです。

編 **「読む」**ということと考えると、現在のピンディスプレイは、まだ**「書物」**とは言えないということでしょうか？

岡 そう思います。先にも申しましたように、書物というものは、ある広がりと厚みを持っています。

それが感得できなければ、充分『読書』には供せられないわけです。そのようなことで、ピンディスプレイはまだ**「機械」**の域を出てはいないと思います。

編 しかし、多くの視覚障害者は、ピンディスプレイに**「書物」**としての機能を求めているように思われるのですが？

岡 そのようですね。しかし、それまで育ってはいない、と言っておくことにしましょう。

編 そして、現在のピンディスプレイの機能として、“書物”を求めずとも余りあるものがあると言われるのですね？

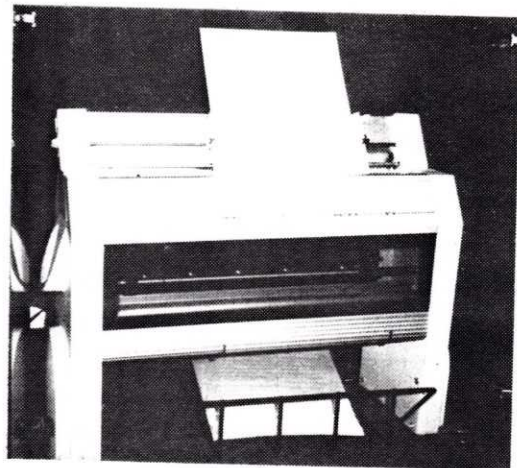
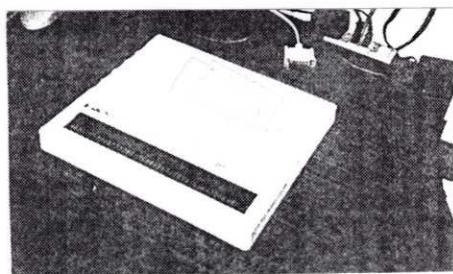
岡 そのとおりです。私が今行っていることは、紙に書かれた『漢点字』を読み、ピンディスプレイを『漢点字』のモニターとしながら文章を書く、ということなのです。

編 そして、『漢点字』を読み書きするのに、この『漢字源』が大いに役立つということですね。

岡 そのとおりです。『漢点字』を使用する人が多くなれば、必ず必要とされる辞典です。

編 この後に、「点字毎日」の投書欄に送られた原稿を収録します。ご一読下さい。また次回は、本会の活動の目的とその方法についてお話しいただく予定であります。ご意見ご感想をお寄せ下さい。

ピンディスプレイ



点字プリンタ

漢点字で本を読みませんか！

漢点字羽化の会 岡田 健嗣

古来学問といえば、書物を「読む」ことを指して言いました。

今日、私たち視覚障害者も学問する機会を多く得ることができるようになって来ました。学問と言わずとも、『読書』することによって知識を得たり、あるいは『読書』そのものを楽しむ機会が増えて来ました。

故川上泰一先生が『漢点字』を世に問われてから約四半世紀が経ちます。私も一九七八年から少しずつ勉強して来ました。先生は、常に「読む」ということを強調され、『漢点字』の位置づけをそこに求めておられました。視覚障害者にとって、『文字』と呼べるものは、触読文字である『点字』を置いて他にはない。その『点字』で、日本語の標準的な表記法である「漢字仮名交じり文」が表現できなければいけないし、それを「読む」ことで、初めて社会参加が実現できると言うのです。

しかし、残念なことにこの『漢点字』は、未だ十分な普及を見ておりません。その理由を考えてみますと、この日本の社会では、視覚障害者の『文字』を読みこなす能力が求められておらず、それが問われずに済まされている現状に行き当たりります。

一方「書く」ことをみますと、コンピュータの普及が、その壁を大幅に低くしてくれました。それは「墨字を書く」という年来の課題をいとも容易く解消してくれたのです。しかし、問題は始めにもどって、今も「読む」ことを抜いては「書く」ことはできない、という基本的な命題が残っています。

私たち漢点字羽化の会では、この程、横浜国立大学の村田忠禧教授のご尽力と、ボランティアの皆さまのご協力を得て、『漢字源』の漢点字版を製作して、横浜市立中央図書館におさめることができました。今後も漢点字の書物を作って、希望される皆さまにお渡ししたいと頑張っております。

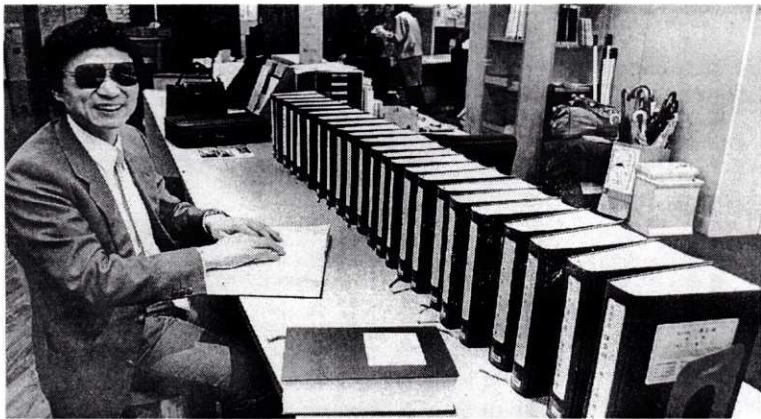
有意の若い皆さま、人生を豊かに、手答えのあるものにするために、漢点字を身につけて、『読書』をしてみませんか？経験にとらわれず、果敢にチャレンジしてみませんか？皆さまのニーズの高まりをお待ちしています。

特集2

新聞掲載記事!

漢点字版『漢字源』の完成に伴い、多くの新聞・テレビ等に報道させて頂きましたので、ここに掲載させていただきます。

視覚障害者の「知の世界」豊かに



ずらりと並び、漢字源の漢点字訳を前に、感激ひとしおの岡田会長

横浜市中央図書館

横浜漢点字羽化の会

漢和辞典を点訳

視覚障害者に漢点字の普及を、会員五十三人だ。同会は五年前に発足し、

及ぶ。

漢点字とは、六つの点で五十首を表現するかな点字に対し、八つの点で六千四百以上の漢字を表現できる触読文字のこと。この普及を担うグループが現在、市内で活動している。横浜（世）は、「漢点字をマスターしている視覚障害者はまだ

まだまだ少なく、全国でも百人程度」と実情を明かす。



↑ 入力した日本語を、漢点字に変換するパソコンソフトを会員が開発

会員開発の ソフト活躍



だが、会員の木下和久さん（左）が、パソコンに入力した日本語を漢点字に変換するソフトを一年がかりで

漢点字の普及の方策を探るメンバーは、鏡谷（ゆきや）の、マツトセンター

開発したことで、書籍の漢点字訳が簡単にできるようになり、普及に明るい兆しが見えてきた。

同会は漢和辞典「漢字源」（学習研究社刊）の漢点字訳を、関係者の協力を得て先ごろ作成し、合計九十冊に及ぶ同書を横浜市中心図書館に譲渡。同館は、「より多くの視覚障害者に、この辞典を利用していただく」と話している。

岡田会長は、「この次は鏡谷（ゆきや）の、マツトセンターを学ぶ視覚障害者のための参考書や、用字用語辞典などの漢点字訳を完成させ、広範な利用を図りたい」と目標を掲げる一方、こんな悩みを漏らした。

「漢点字訳のソフトはあるが、それを動かすパソコン本体が足りない。どなたか不要なDOS・Vのノートパソコンをお持ちの方がいたら、漢点字普及のため、ご寄付をお願いします」

問い合わせは木下さん 045(800)9464。

漢点字の普及に尽力

〈漢点字とかな点字の違い〉

かな	● ● ● ●	● ● ● ●	おか
	● ● ● ●	● ● ● ●	
漢字	● ● ● ●	● ● ● ●	丘
	● ● ● ●	● ● ● ●	
漢字	● ● ● ●	● ● ● ●	岡
	● ● ● ●	● ● ● ●	
漢字	● ● ● ●	● ● ● ●	陸
	● ● ● ●	● ● ● ●	

かな点字では「おか」としか表せないものが、漢点字では「丘」「岡」「陸」と多様な表現が可能に

(●は点を打たない部分)

視覚障害者に 読書の喜びを

横浜のボランティア団体

漢点字は、従来の六点式
のかな点字とは違い、八つ
の点を使って漢字を表記す
る。

同会は一九九二年に発足
したボランティア団体で、
会員は現在五十三人。これ
まで県ライトセンターを活
動拠点に、漢点字の普及や、
書籍類の漢点字訳などに取
り組んできた。

今回作成された「漢字源」
の漢点字版は合計九十冊。
同書は昨春、横浜国大が視
覚障害を持つ学生のために

視覚障害者に漢点字を。横浜漢点字羽化の会（岡田健嗣代表）が漢字字典「漢字源」（学習研究社刊）の漢点字版を作成し、横浜市中心図書館への譲渡式が十五日、県ライトセンター（旭区二俣川）で行われた。

漢点字版「漢字源」を作成

会員が半年掛け 国大などが支援

市中央図書館に提供

作成した例があるが、同会
は公共施設への設置を狙
い、出版社と同大学の協力
を得て、会員が半年がかり
で同書を作り上げ、このほ
ど横浜市中心図書館へ実費
での提供が決まった。

自らも視覚障害者である
同会の岡田会長は譲渡式に
臨み、「漢点字は、かな点
字とは比較にならないほど
の（多様な）表現が可能で
す。この本をより多くの視
覚障害者に利用してほしい」と話していた。



横浜漢字点字羽化の会代表 誠父（しんぷち）師。明治学院大卒。趣味は「音楽鑑賞」。横浜市中区在住。47歳。

「これは、かなし表現で書きませんが、これを使えば、現簿障害者にも本来の豊かな日本語が味わえるんです。六〇の点で五十音を表すかな点字に引き、八〇の点で六十以上の漢字を表せる漢字点字。の普及と点字で、情熱を燃やすグループのまとめ役だ。

先天的に目が見えないが、無類の読書好き。だが、かな点字では文字表現の強みが分からず、「漢字を理解したい」と渴望した。そんな時、漢字の創案者・故川上泰一さんと出会い、その習得に至

「これまでは、かなし表現で書きませんが、これを使えば、現簿障害者にも本来の豊かな日本語が味わえるんです。六〇の点で五十音を表すかな点字に引き、八〇の点で六十以上の漢字を表せる漢字点字。の普及と点字で、情熱を燃やすグループのまとめ役だ。

先天的に目が見えないが、無類の読書好き。だが、かな点字では文字表現の強みが分からず、「漢字を理解したい」と渴望した。そんな時、漢字の創案者・故川上泰一さんと出会い、その習得に至

えっ漢字も表現できる点字があるんですか
「現在の約 千三百の常用字が普通に読めます。例えばかな点字では「おか」とか認識できないものが漢字点字では「正」「陸」と区別がでるんです。」

市内のボランティアグループが普及活動

「漢字のない世界を想像できますか。視覚障害者にも漢字を知ってもらおうと、横浜市内のボランティアグループが点字の漢字版である「漢字点字」の普及活動をしている。現在、漢字の辞書を作る中、漢和辞典「漢字源」の漢字訳に取り組みしている。ボランティアがパソコン漢字変換ソフトの開発から製本までを手作業で行うという労作だ。点字版「漢字源」の完成後は、横浜市中区図書館に置かれる予定だ。

「漢字点字」は、今から二十五年前、大阪府立盲学校の教師だった故川上泰一さんが発案した。漢字点字も漢字と同じように、点字で表現した部首の組合せで表される。仮名の点字は六〇点、一文字だが、漢字点字は八〇点で、マスを作り、一三マスで一文字を表す。仮名点字は全部で二十四文字だが、常用漢字はすべて漢字点字で表現できる。

横浜市中区山元町の針きょう師、岡田健嗣さんは生まれつきからの視覚障害者。漢字点字に出合ったのは二十三年前。岡田さんは、そのときのことを「世界がまるでカラーに変わった」と表現している。



「漢字点字化の会」のメンバーの岡田さん、木下さん、（左）何でも屋の宗助俊子さん（右）川上泰一さん

視覚障害者に漢字点字を

「漢字源」点訳に挑む 製本も手作業で

現する。漢字点字を知る前は、同音異義語などでも苦労するところがあった。

会話の途中に「そなた、この言葉が聞き取れないから、自分で判断して間違え、恥をかくことも多かった。それを繰り返すうちに、引く足場案になったという。晴晴（例）又は「鬱情」や歌謡曲の題名などで意味がわからないものも多かった。

漢字点字は、約二千の常用漢字を夢中で勉強、半年で習得した。世界がガラッと変わった。持来天皇和歌「春さきて夏衣ほすて夫の貴山」の表す「白砂」は漢字を知る前には「白砂」も意味がわからなかったが、今ではイメージがわく。味わいがますます濃くなる。

漢字源の存在広めたい。願がないものさうです。

「漢字源」の訳目録は昨年、横浜市内大教育者野村てきと、田舎教授に託して完成させた。「相対的」か、体系的か分からない。利用されるのは今のところ大層関係者には限られている。会員の木下和久さんが完成させた漢字変換ソフトは、村田教授を通じて入手した電子ソフト版の「漢字源」のデータを輸入し、木下さんは、市広報をみて回覧を参加し、「漢字源」の存在を知ったときは驚くと同時に、素晴らしいと思った」と話す。

ペー、の糊のりつけや裏紙つけないと製本もすべて、会員の手作業だ。B判で一冊百九十冊、全九十冊の表紙は白砂、表紙の裏紙は白砂の貴山、岡田さんは「一般の人には、前は「白砂」も意味がわからなかったが、今ではイメージがわく。味わいがますます濃くなる。」

という岡田さんが代表となる「横浜漢字点字の会」を設立したのは一九九二年。講義会の開催や本や雑誌の漢字訳に取り組みしてきた。昨夏から典の漢字版を作る中、学書研社「漢字源」の点訳

連載

点字から識字までの距離 (一)

山内薫 (墨田区立緑図書館)

全国の視覚障害者数およそ三五万人の内、約二割が点字使用者で、点字常用者となるとその数は三万人そこそこといわれている。視覚障害者の内、三分の二は六〇歳以上、その大半は中高年になってからの中途失明者なので、その後点字を常用するまでには至らない人が多い。点字図書館の調査によると、点字図書館に登録している利用者の内、点字触読者は一九八二年に一七、二八三人(三八・〇%)、一九八八年に二七、八一六人(四七・七%)、一九九三年に三二、七四〇人(五一・七%)と増加している。(ただし点字図書館の場合には一人で複数館を利用している人がかなりいるので、この数字がそのまま点字触読者の数とは言えない)

録音図書の普及によって一時は「点字離れ」という言葉が取り沙汰されたが、パソコン点訳の普及で点字環境は一挙に改善され、その必要性も増してきている。「点字の市民権」とか「点字こそ我々の文字」と視覚障害者団体の人たちは、声を大にして言うけれども、

一九九〇年の日本点字制定百周年を機会に全日本視覚障害者協議会が全国三、三二一の自治体を対象に実施したアンケート調査によると

(一) 各種広報を点字化しているのが 九・八%

(二) 点字による請願書・陳情書を認めているのが

三三・六%

(三) 役所からの通知物を点字化しているのが

三・二%

(四) 点字による役所への提出書類を認めているのが

五・五%

という寒々しい結果が実態であることが分かった。しかも自治体の回答率が四五・一%なので、実際はその数値の半数と言ふことになるだろう。またそれぞれについて将来実施を考えている、または検討すると答えた自治体は(一)七・六%、(二)一七%、(三)四・四%、(四)一一・四%しかなく、一市民の当然の権利とも言える公的な部分での点字の現状にして、この程度なのである。

では、現在入手できる点字図書がどのくらいあるかというと、その数は教科書や、点字楽譜を含めておよそ四五〇〇タイトルで、一般書籍の五〇万冊余の僅か〇・九%にしか過ぎない。つまり読みたい本を選択する範囲が一般の書籍に比べて一〇〇分の一にも満たな

い状態で、その内容にもかなりの偏りがある。ちなみに現在入手できる漢点字書は医学関係二二タイトル、医学以外の専門書が二五タイトル、文学関係が一八〇タイトル、ノンフィクション、実用、趣味等が五〇タイトルの合計二七五タイトルしかないのである。

ところで、国際連合は一九九〇年を国際識字年と定めた。一九五一年にユネスコは識字の定義を「日常生活における簡単な文章を、理解して読み書きできること」とし、日本は識字率一〇〇%などとうそぶいていた。一九六二年には「所属する集団や地域社会において、識字が必要とされるすべての活動に参加できる基本的な知識や技能を身につけているか、自分自身または地域社会の発展に向けて、その技能を発揮していくのに十分な読・書・算の能力をもつこと」とし、その後「①文字の読み書き、計算の能力、②コミュニケーションできる能力、③社会において技能を発揮する能力、④機能的識字能力、⑤文化創造」という五つが定義として適用されている（現在日本は識字率九九%とっている）。ここで言う機能的識字というのは、単に文字が読めるだけではなく、その力を使って考えを組み立てることができることを指す。

国際識字年にユニセフが作成したパンフレットには次のような文言が記されていた。

手紙を読み書く

電話帳で番号を調べる

契約書や健康保険証を読む

道に迷ったときに地図を読む

薬の効能書きがわかる

道路標識が読める

子どもの宿題を手伝ってやれる

職業上必要な基本的な読み書きの技能がある

有毒という表示や危険という警告がわかる


もし、契約書や健康保険証が読めなかつたら、薬の効能書きが読めないとしたら、私たちはどうするだろう。先に見た点字の社会的な状況は、読めるにも関わらず、それらが読める状態になっていない現状を示している。この問題は国際識字年に提唱された識字の問題に深く関わっていると言わざるを得ない。

〔参考資料〕『視覚障害者に対する文字情報サービス






の現状と課題』視覚障害者文字情報サービス

検討委員会、『識字とは』解放出版社

例えば「目」という字は  です。何となく目に見えますね。

さて、この「目」を偏にして「眼」という字を書いてみると  となります。「眼」は偏と旁で2マスになりますので、1マス目に始点、2マス目に終点を入れるのです。


ところで先程、平仮名は仮名点字と同じだと書きましたが、片仮名はどのように表すのでしょうか？


例えば、前述の「あいうえお」を「アイウエオ」と書いたとします。基本的に「    

アイウエオ

漢字の始点・終点を使って1文字の漢字を区別したのと同じように、符号を付けてどこからどこまでが片仮名であるのかを示すのです。

それでは、文章にしたときに、仮名点字と漢点字はどのように書かれるのか見てみましょう。


わたしね と一きよ一え いきます


私は 東 京 へ 行きます。

上記のように、仮名点字は「音（おん）」を基本に考えますので、「とうきょうへ」とは書きません。

漢点字は、「漢字仮名まじり文」で書きますので、私たちが書く字（墨字といいます）と全く同じように書くことが出来るわけです。

いかがでしょうか？ 模様から少し字に見えてきましたか？
街で点字の表示を見かけたら、ちょっと覗いてみて下さい。


「仮名点字」と「漢点字」

宗助 悦子

エレベータや電車の券売機、最近は色々な所に点字の表示を見かけるようになりました。

これは全て「仮名点字」で書かれています。

晴眼者には模様に見える点字。いったいどのような仕組みになっているのでしょうか？

「仮名点字」は6点式で、わかち書きをします。6点式とは、の6点を1マス、個々の点を1の点・2の点…と呼び、基本的には1マスで1字を表します。

では、「あいうえお」と書いてみましょう。


あ　い　う　え　お

さて、ここでローマ字を思い描いてください。ローマ字では「AIUEO」と基本となる母音があり、この母音に子音「K」を前置して

「KA, KI, KU, KE, KO」というように、子音+母音で表されています。



仮名点字も同じで「あいうえお」に子音にあたる「6の点」を追加して


か　き　く　け　こ

仮名点字には平仮名、片仮名の区別はありません。

次に「漢点字」について考えてみましょう。

平仮名については、仮名点字と同じです。仮名点字では6点でしたが、漢点字は8点で漢字を表します。

仮名点字の  の上に始点 (0)・終点 (7) がついて  となります。

漢点字は漢字と同じように、偏と旁等から成り立っています。偏や旁をそれぞれ1マスで表しますので、1つの漢字が1マスから3マスで書かれることとなります。

この、始点・終点とは、どこからどこまでが1つの漢字なのかを示しています。

「横浜漢点字羽化の会」一案内

当会は、平成四年四月に岡田健嗣を代表者として、会員数五名にて発足しました。

平成八年一月 講習会を開催、会員数が四十二名に増員し、本格的な活動を開始しました。

平成八年六月 神奈川県ライトセンターの事業の一つである「プライベートサービス」(*)の一翼を担うこととなり、多くの作品を漢点字訳する機会に恵まれました。

平成八年八月 横浜市立中央図書館に当会で漢点字訳・製本した資料を実費提供することとなりました。平成九年三月に第一回目として、学習研究社刊「漢字源」を横浜市中央図書館に提供しました。また、平成九年度以降も随時提供していく予定です。平成八年十二月現在、会員数は五十三名になりました。今後、当会の主旨にご賛同頂ける方々に、お手伝い頂きたいと考えております。

(*) プライベートサービス：一般の視覚障害者よりニーズを募り、ライトセンターに登録しているボランティア団体が漢点字訳・提供するサービス。

「活動目的」

視覚障害者の言語活動において、以下の四点を目的として活動しています。

① 漢字体系の触読文字である『漢点字』で表された資料を製作する。

② 『漢点字』へのニーズを持つ者に対してそのサービスを行う。

③ その活動を通して、日本語の標準的な表記法である『漢字仮名交じり文』を、視覚障害者の文字言語にも実現されるべきことを、一般社会の認識に求める

④ 『漢点字』の普及を図る。

〔活動内容〕

①従来の六点式のかな点字では理解できない古典・
学術書等の作品を中心に視覚障害者のニーズを含
め漢点字訳する書籍等を選定します。

選定した書籍等をボランティア会員がテキストデ
ータを入力し、会員が開発した変換システムを通
して漢点字に変換・製本します。

製本した書籍等は図書館及び個人へ提供します。

②毎月十五日に例会を開催、運営報告・それぞれの
作業状況の報告・漢点字及び変換システム等の勉
強会を行っています。

③毎年四月に定期総会を開催します。

〔会費について〕

正会員 月額 三百円
賛助会員 年額一口 千円

〔活動実績及び活動計画〕

（定期刊行物）

・漢点字月刊誌「横浜通信」創刊号〜十六号発行

（以下続刊）

・朝日新聞「朝日歌壇・俳壇」の漢点字訳発行

（購読希望者へ配布）

・朝日新聞「内視鏡」等医療記事を希望者へ配布

・活動目的の一つである、漢点字の普及及び一般社
会に理解を求めるために、平成九年四月より機関
誌『うか』を創刊し、晴眼者を中心に配布する。

（専門書籍の漢点字訳書）

・「秋田県盲学校模擬試験問題」

・「栃木県盲学校模擬試験問題」

・「横浜市立盲学校模擬試験問題」

・鍼灸・手技教育研究会編「はり師きゅう師・あん
摩マッサージ指圧師国家試験 全科の要点」

・「東洋医学概論ノート」

・「生理学講義ノート」

・学習研究社刊「漢字源」

(現在製作中の書籍)

- ・ 佐佐木幸綱 「作歌の現場」
 - ・ 佐佐木幸綱 「手紙歳時記」
 - ・ 永瀬清子 「すぎ去ればすべてなつかしい日々」
 - ・ プラトン 「饗宴」
 - ・ 上田和夫訳 「小泉八雲集」
 - ・ 芥川龍之介 「侏儒の言葉」
 - ・ 鈴木志郎康 「新選 鈴木志郎康詩集」
 - ・ 蒲松齡 「聊齋志異」
 - ・ 新潮臨時増刊 「短歌俳句川柳一〇一年」
 - ・ 新潮名作選 「百年の文学」
 - ・ 大岡信選 「現代詩の鑑賞一〇一」 他
- (平成九年度活動予定)
- ・ 金谷治訳注 「論語」
 - ・ 阪倉篤義校訂 「竹取物語」
 - ・ グレゴリー・ベートソン 「天使のおそれ」
 - ・ その他 ニーズを基に書籍・辞典等の漢点字訳をする予定。

編集後記

昨年の一月に当会の講習会を受けてメンバーとなつてから、わずか一年数ヶ月間で図書館へ漢和辞典を納め、機関誌を創刊出来るようになるとは想像も出来ませんでした。

しかし、その陰で横浜国大の村田忠禧教授、市議の大滝正雄先生を初め多くの方々にご多大なご助力を頂戴いたしました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

また、今回転載させていただいた諸新聞社・テレビ放映して下さったテレビ神奈川・NHK各社のご担当者殿、ありがとうございます。

会の活動も、機関誌もまだまだ模索している状態です。試行錯誤を繰り返しながら多くの視覚障害者に漢点字を学んで頂けるよう、活動を進めて参りたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い致します。

次回の発行は、六月十五日です。

ご意見・ご感想をお寄せ下さい。

FAX 045(261)1723

宗助 悦子

1. まえがき

EIBRK 漢点字変換システムは、コンピュータ入力されたテキストファイルを元にして、これをそのまま漢点字が印刷できる点字プリンタ用のファイルに変換するシステムです。漢点字は、漢字仮名交じりの通常の文章(墨字文)を、そのまま点字にするのが原則ですが、漢点字の世界には各種の制約があって、無条件ですべての墨字文が正確に変換されるというわけではありません。そのために、漢点字に変換される元の文章(テキストファイル)を入力するに当たっては是非守っていただきたい規則が沢山あります。

ここでは、EIBRK システムのコンピュータへの導入から始まるシステムの使い方を中心に、テキスト文の作り方を含めた注意事項などについて、できるだけわかりやすく解説を加えて行きたいと考えています。

2. 利用可能なコンピュータ

この漢点字変換システムは、元となるテキストファイルがあれば、変換そのものは非常に簡単に、自動的にできるようになっています。そして、テキストファイルの入力は、MS-DOS のフロッピーに記録できるものであれば、たいいていのパソコンが使えます。パソコンの場合は、一般にワープロソフト(「一太郎」や「MSワード」など)が使えますが、エディタと呼ばれるテキストファイル入力専用のソフトの方が、身軽で使いよいようです。ワープロ専用機で入力したのも、MS-DOS のテキストファイルに変換できる場合は使えます。ただ特殊な場合として、点字を直接入力するには、MS-DOS の場合には「一太郎 Ver.4」が便利です。これは、点字のパターンを外字に登録しておいて、その外字ファイルを「一太郎」で使えるようにしておく、入力した点字が画面で確認できて、プリンタにも打ち出せるからです。また Windows の場合には、外字ファイルをシステムに登録しておく、「一太郎」だけでなく、その他のワープロソフトや、エディタでこれが利用できるのも便利です。しかし、多少の不便はあっても、一般のパソコン(MS-DOS)、ワープロいずれでも点字を直接入力することができます。これについては、後で詳しく説明します。

テキストファイルから漢点字への変換は、EIBRK システムによって行います。現在のところ、このシステムは、NEC の 98 シリーズのパソコンでしか動きません。DOS-V パソコンでも、これが動かせるよう検討中ですので、そのうちにこれが可能になることでしょう。

3. 点字プリンタ

点字プリンタは、一般のパソコン用プリンタのように標準化が進んでいません。極端な場合には、同一メーカーの同一機種でも個々のユーザーによって仕様が違っている場合があります。特に、8点点字が打てるのは、機種が限られています。現在のところ、EIBRK が対応しているのは、パーサポイント（J型とD型）と、エベレストです。プレイル・コメントも、一応動作を確認していますが、まだ実際に使っていませんので、使うには細かい調整が必要かも知れません。一般に広く使われている ESA721 は、原則として6点点字用なので、8点点字を打つには特別なプログラムが必要です。さらに、この機種には旧型と新型があって、仕様内容が少し違うようです。これらのことを含めて、ESA721 での漢点字印刷は、検討中です。これもそのうちに漢点字の印刷が可能になるでしょう。

4. システムのインストール

EIBRK 漢点字変換システムは、以下のファイルからなっています。必ずしもすべてが必要というわけではありませんが、原則としてすべてのファイルセットをお渡ししています。プログラムを動かすには、◎印のファイルがすべてが必要です。印刷のみを行うには、○印のプログラムと、EIBRKH.EXE 以外の◎印のファイルが必要です。インストールプログラムを使えば、バージョンアップの時は、必要なファイルのみを変更し、ユーザーが設定した内容などは変更しないようにするモードが用意されています。

- ◎ EIBRKH .EXE : 漢字変換の本体プログラム
- EIBRKP .EXE : 印刷用のプログラム
- EIBRKG .EXE : ページ行編集用のプログラムと、点字変換されたデータを一太郎文書に変換するプログラム
- △ EIBRKB .EXE : ピンディスプレイ表示可能の変換プログラム
- INST .EXE : 当変換システムのインストールプログラム
- ◎ BRUN45A .EXE : 諸プログラム実行時の補助プログラム(ランタイムモジュール)

- ◎ TENJ2PTN.DIC : 点字表示用のパターンデータ
- ◎ KANJCOD3.DIC : JIS 第一、第二水準漢字変換辞書
- ◎ KIGOU1 .DIC : 普通記号変換辞書
- ◎ KIGOU2 .DIC : 特殊記号変換辞書
- ◎ ERRCODE .TBL : エラーメッセージ表示用テーブル
- ◎ EIBRK .INI : 初期設定用データセット
- EBMNL .TXT : EIBRK システムのマニュアル(一太郎 Ver.4 用外字コード)
- EBMNLW .TXT : EIBRK システムのマニュアル(Windows 用外字コード)

以下のファイルは、種々の補助的作業をするためのプログラムや、マニュアルのファイルです(詳細説明は省略)。

- DBLCONV.EXE : 半角文字の入ったテキストファイルを、すべて全角文字に変換する
- JX.EXE : エディタ(JX.DOC はそのマニュアル)
- LHA.EXE : ファイルの圧縮、解凍用
- SHINQCHK.EXE : 新旧で入れ替わった漢字コードの検索
- TBCONV.EXE : テキストファイルに変換されたバイナリーファイルを、元のバイナリーファイルに変換する
- TXTCONV2.EXE : 一太郎 Ver.4 の点字外字コードと Windows 用の外字コードの相互変換
- WPCONV.EXE : 各行に改行マークが入ったワープロファイルから不要の改行マークを削除する
- WPCONV.DOC : WPCONV.EXE のマニュアル

まず最初にシステムの入ったフロッピーディスクを、フロッピードライブに入れます。そして、そのドライブをカレントドライブにします。例えば、フロッピードライブが C: の場合は「C:リターン」とします。

次に「INST リターン」と入力するとインストールプログラムが立ち上がり、新規なのか、バージョンアップなのか、また必要なドライブ名などを聞いてきますので、それに答えて行けば、自然に終了まで行きます。インストールを途中で中止したい場合は、どの時点でも、ESC キーで中止することができます。

以下に主な注意事項を記します。

- (1) インストールするドライブの指定では、A:とか B:とか、ドライブ名だけを入力します。次のサブディレクトリの指定では、¥TENJなどのサブディレクトリ名だけを入力して下さい。
- (2) 「ファンクション・キーで選択するテキスト・ファイルのパス(ドライブ + サブディレクトリ)」というのは、テキストファイル名を指定するときのサブディレクトリを、ファンクションキーの1から3に割り付けておいて、ワンタッチで選ぶというものです。ここで、例えば f.1 に C:(フロッピードライブ)を、f.2 に A:¥DOC(例えばハードディスクの文書専用ドライブとして確保してある場合)を指定しておく、と、テキストファイル入力の時、都合のよいドライブを簡単に選択することができます。このファンクションキーに割り付けられたパスは、その後メニューの「オプション」で変更することができます。
- (3) インストールが完了すると、このコンピュータの起動ドライブを聞いてきます。このドライブのルートディレクトリに、あとで **EIBRKH** を簡単に起動できるバッチファイル(**EB.BAT**)が作られます。つまり、どのドライブにいても、「**EB**」と入力すると、**EIBRK** システムが立ち上がります。

しかし、プログラムのあるディレクトリにもう1つの **EB.BAT** があると、そのディレクトリがカレントであったとき、その **EB.BAT** が優先されますので、混乱が生じます。したがって、この **EB.BAT** は、起動ドライブのルートディレクトリだけにあるよう、余分なものは削除しておいて下さい。